まえがき

本書で取り上げるのは「文の包摂」という逸脱的な言語現象です。そのような「規則に当てはまらない例外的な言語表現」に関心を持ったきっかけは交換留学でした。私は学部時代にアメリカ、タイ、台湾に留学し、3つの外国語を学びました。その中で「規則」を教われば教わるほど、それに当てはまらない「例外」と出会うことになりました。留学先でできた友達に日本語の「規則」を教えようとすると、母語である日本語にも多くの「例外」があることに気づかされました。そこで、ことばの研究がしてみたいと思い立った私は大学院に進学し、以下のような特異な表現に興味を持ちました。

「振り込め詐欺」「母さん助けて詐欺」（特殊詐欺の名称）
「やってみなはれ精神」（サントリーの企業理念）
「ウルトラ！ゼンリョク！幻のポケモンをもらおうキャンペーン」（キャンペーンの名称）
「うわっ！ダマされた大賞」（テレビ番組名）
「いちごにキュンですパフェ」（スシローで販売されているデザートの名称）

この他にも「早くしろオーラ」「困ったな状態」「どっちなんだよ問題」「あったらいいな程度」「今すぐ辞めろ発言」「当たって砕けろ作戦」「遊んで遊んで攻撃」「俺すごいだろアピール」「今から帰るよメール」「勉強やりたくない症候群」「朝はパンだ派」「やっちまったな感」「私頑張ってます風」「いいねボタン」「なんでも言うこと聞きます券」「かまってちゃん」「もったいないおばけ」「そんなことないよ待ち」など多くの用例があります。ネットニュースやYouTubeを見ていても、マンガや雑誌を読んでいても、誰かと会

話をしていても、このような表現をよく見聞きします。

これらの表現はどのような点で例外的な言語現象と言えるのでしょうか。例えば、「早くしろオーラ」という表現が名詞修飾構造（早くしろ＋オーラ）だとすると、通常は修飾節の述語動詞を命令形にすることはできません。あるいは修飾節と名詞との間に引用標識「という」を介在させなければなりません。複合名詞だとすると、語の内部にはそれより大きい単位（「早くしろ」という文の単位）は入り得ないはずです。

それまでに学んだ日本語学の知識では説明できず、「この表現は一体どんな仕組みで作られているのだろう？」という疑問が生まれました。一般に言われている日本語の規則を逸脱する表現であることがわかると、次に「どうして逸脱表現なのに、こんなにたくさんの人たちに使われているのだろう？」という疑問を抱きました。本書ではこの2つの疑問の解決を目指し、実例に基づく記述的・理論的な考察を通して私なりの答えを示しています。

私はこの不思議な言語現象を便宜的に「文の包摂」と名づけ、用例を集めては一つ一つ観察していきました。そうすると、これらの逸脱表現の中にも傾向や規則性が見えてきました。「例外的な現象の中にも規則性があること」「逸脱表現も言語体系を構成する1つの要素であること」におもしろさを感じ、ますますこの研究が好きになりました。

語彙論だけでなく、音韻論、形態論、構文論、意味論といった種々の分野にまたがる興味深い言語現象であり、さらに文字表記の研究、引用研究、談話研究、打ち言葉の研究、コミュニケーションの研究などにもつながる論点が見つかっていきました。さらに調べていくと、古典語や外国語にも類似する現象があることがわかりました。本書ではそのすべてを論じるまでには至りませんでしたが、素朴な疑問を出発点として用例を1つずつ見ていくことで徐々にその視界が広がり、今では大きな発展性を秘めた研究になりました。

この研究がいつの日かことばの不思議の解明と言語学の発展に寄与するきっかけの1つになれば幸いです。